

槿花一日の栄

入り組んだ住宅街をひたすら走る
おれは息も切れ切れになにかを指す
どこそこも同じ造りで迷路の様相
そんな模倣の模倣を疾走していく
おれはとにかく焦燥していた
とことこ、などとは歩けない
目的は判然としないまま、
終点もきめられず、
やみくもに向かう
目的がないままそこを目指す
いちど見掛けた公園を過ぎてまた始点に戻る
繰り返しの繰り返しに内心辟易
ビジョンはコピーのまたコピー
さきには進めず、
走る行為だけがゆるさされている
だれがきめたのか、
自分の意志で行動しているのか、
なにもつかめないまま駆け抜ける
走りをやめられず、
あやつられ洗脳され、
おれはもうくたくただった
休息など決しておとずれない

このまま人生行路をむだに過ごすのだろうか

それが良いのか悪いのかわからない

理由などいらないし、

理由など求めても、

それは理由のかたちをした、

理由を捻出するための理由だった

だからおれは、

走ることしか望まない

考えない顧みない

頭のなかはつねに空白でからっぽ

両手足を前後に振る単純作業は未来永劫

だってよお、

走り疲れでもしたらそのままポックリだろう

だれかのさげびにおれも共鳴

死への恐怖が四肢の停止をきらう

ただでさえ、

身体の空洞の内側を覆う粘膜は着実に腐敗の一途

相違ない